

『溺愛彼氏と恋わずらいの小鳥』

著：若月京子

ill：明神 翼

観月光流は十八歳。本当なら新入生として大学に通っている年齢だが、中学二年生のときから引きこもりをしていた。

相談がある、と友人に連れていかれた放課後の理科室——待ち受けていた二人とともに襲ってきたショックで、外に出るのが怖くなってしまったのである。相手は不良とかではなく、ごく普通のクラスメイトだったのが余計に衝撃的だった。

物音を聞きつけてひどいことになる前に助けられたものの、彼らは一様に光流が誘う目を見た、光流が悪いと言った。

光流は隔世遺伝でフランス人の祖母の血が色濃く出て、金茶色のフワフワの髪と緑色の目。顔も祖母譲りの西洋的な端整さに、母の日本人的な可愛らしさがプラスされていて、男か女かよく分からないと言われる。

子供のときはしょっちゅう女の子に間違われたし、十八歳の今も細くて中性的だと思う。

中二のときはまだ身長も低くて女の子っぽかったせいも、性的なからかいをされたこともあった。

対人恐怖症に視線恐怖症、重度の上がり症を併発し、信頼する本当に身近な人以外とはまともに話せない。がんばりすぎると目眩と動悸で過呼吸になったりするので、誰かと接触するときには家族の同伴が必要だった。

「ボクって、情けない……。もう十八歳になったんだよなあ……。どうしよう……」

高卒認定試験には受かっているし、英語とフランス語も喋れる。だからといってプロの翻訳家になれるかといったら自信がなく、未来が見えない状態だった。

小さい頃からピアノを習っている光流の趣味は作詞と作曲で、ストックはすでに五十曲以上。光流に甘い家族はどれもいいと絶賛してくれるが、身内の欲目なのは分かっているし、趣味で食べていけないのも分かっている。

幸いにして観月家は資産家で、両親も兄、姉も無理せず家にいなさいと言ってくれている。年の離れた末っ子の光流は何かと甘やかされ、でもこのままじゃいけないと焦っていた。

「成人まであと二年……。なんとかしなきゃなあ……」

でも、外の世界と人々が怖い。

光流は自室でピアノを弾きながら、ハーツと溜め息をついた。

そこに内線がかかってきて、兄の光一郎にケーキがあるからリビングに来るよう言われる。

「わーい、ケーキ」

今日は日曜日で、光一郎も仕事は休みだから、出かけたらしい。

光流はピアノの蓋をして、いそいそと一階へと下りていった。

リビングにいたのは、兄だけではない。三年ぶりに会う兄の親友——南雲明仁がいた。

「アキちゃん！」

「久しぶりだな、光流。ずいぶん大きくなって」

「久しぶり！ 大学を卒業してから、全然来てくれないんだもん」

明仁は幼等部からの兄の親友で、観月家にも泊まりがけでよく遊びにきていた。光流とは十一歳も離れているからずいぶんと優しくしてくれて、忙しい両親に代わって遊園地や花火大会など、いろいろなところに連れて行ってくれた。

明仁には五つ下の弟がいるようなのだがヤンチャなガキ大将タイプで、光流に甘えられると嬉しいらしい。だから光流も遠慮なく甘えられて、家族以外で信頼する数少ない人の一人だった。

「仕事が忙しかったんだよ。他人の金を動かすとなると責任も大きいからな。仕事を辞めて今は自分のだけしかしていないから、時間はたっぷりあるぞ。また遊ぼうな」

「わあ、嬉しい……って、言っているのかな？ アキちゃん、無職になっちゃったの？」

観月家の子供たちが通っていたのは幼等部からあるお金持ち学校なので、明仁の家も資産家だ。明仁は祖父母からの遺産や生前贈与やらで不動産や株などの不労所得があるから、仕事を辞めても生活に困らないらしい。

「無職は響きが悪いから、株のトレーダーってことにしてる。ウソじゃないしな」

明仁の隣に座った光流は、三年ぶりに見る顔をジーツと観察する。

黒々とした髪と目の、いかにも日本男子といった凛々しい容貌。男らしく整っていて、西洋的な容姿の光流はいつもいいなあと思っていた。

「アキちゃん、もうすっかり大人だね。……昔から大人っぽかったけど」

「中身は大して変わっていない気がするが……光流の写真はたまに光一郎から見せてもらっていたが、実物は写真以上に可愛いな。大した美少年っぷりだ」

感慨深いような優しい瞳で見つめられて、光流は照れる。

明仁は相変わらず大人で格好いいが、今はさらに落ち着きが出ている。何年ぶりかで会う明仁の目があまりにも優しく、光流はドキドキした。

「ボク、もう十八歳なんだけど」

「いや、でも、美青年というより、美少年だぞ？ 変わったような、変わっていないような……相変わらずの天使ちゃんっぷりだ」

笑いながら髪をグシャグシャにされて、光流はうーっと唸る。

「アキちゃんも変わってないよ。……でも、そっか。これからは、また会えるんだ。嬉しいな」

無職になったのを喜ぶのはどうかと思うが、嬉しいものは嬉しい。何しろ明仁が証券会社に就職してからというもの、ろくに遊びにきてくれなかったのだ。

「そうそう。そういえば光流、曲を作ってるんだって？ ピアノが上手いのは知ってたけど、曲作りをしてるなんて初耳だ。ちょっと聴かせてくれよ」

「えっ？」

「光一郎に聴かせてもらったんだ。綺麗な声だよな。直で聴いてみたいと思って」

「むうっ、コウちゃん」

恥ずかしいから隠していたのにと、光一郎を睨む。

そもそも家族にだって聴かせず一人で歌っていたのに、酔って寿司を買ってきた光一郎が、ノックもなしに入ってきてばれてしまったのだ。

「コウちゃん、ひどい！」と怒って、泣いて、光一郎は慌てて「内緒にするから！」と謝ったが、それから何度か歌を聴かせてくれとねだられるようになった。

そのうち、「父さんたちにも聴かせてあげよう。喜ぶぞ」と説得され続けて、父親の誕生日にハッピーバースデーを歌い、光一郎にねだられるまま他の歌も歌った。

それから家では解禁状態になったものの、恥ずかしいから他の人には言わないでとお願いした。そうしないと、光流に甘い家族たちが方々で「うちの子は歌が上手いの」と言いふらしかねないと分かっていた。

当然光一郎にも口止めしていたのに、明仁に喋ってしまったらしい。

「この前の、花見のムービーを見せただけだ。桜のシャンパンを一口もらってご機嫌だっただろ」

「よりによって、あれ？」

「あのあと、桜の歌を作ったって言ってたよな？ どうせならそれを聴かせてくれ」

「えー……でもなあ……」

プロじゃないし、人に聴かせるほどのレベルではないと思っている。しかも自分で作詞作曲をしたものだし、自分に甘い家族にならいいけど、明仁に聴かせるのは恥ずかしかった。

「いいじゃないか。綺麗な歌声だったぞ」

「そうそう。身内の欲目じゃなく、光流の歌はいいって」

ためらう光流を二人がかりで説得してきて、そんなに言うなら……と、光流はピアノの前に座る。

うるさいほど心臓が高鳴るのを感じつつ、光一郎のリクエストである、花見を思い出しながら作った歌を弾き語りした。

『桜』とつけたその曲が終わると、明仁と光一郎がパチパチと拍手をしてくれる。

「いい曲だなっ。楽しそうで、少しだけ物悲しくて。光流の声にピッタリだ」

「今年の花見は散り始めで、桜の花吹雪が綺麗だったんだよな～。久しぶりに両親とジジババも集まって、みんなご機嫌で酔っぱらって……楽しかったのを思い出した」

「他のも聴かせてくれよ」

弾き終わったあと、光流はビクビクしながら明仁の表情を見守っていたが、目を輝かせて褒めるその顔に嘘はないように思えた。

「ほ、本気で聴きたいって思ってくれてる？」

「もちろん。光流の歌、すごくいい」

「……………」

優しく見つめられながら言われ、顔が赤くなる。家族以外で初めて自分の作った曲を褒められ、それがずっと憧れていた明仁というのが喜びを増幅させてくれる。

光一郎もうんうんと満足そうに頷き、さらにリクエストしてきた。

「ほらな、言ったろ。身内の欲目じゃなくて、いい曲なんだって。どうせなら、ご機嫌系の曲を聴かせてくれよ。『海』と『花火』希望」

「はい」

嬉しい嬉しいと、思わず頬が緩んでしまう。

光流は肩から力を抜き、ご機嫌でリクエストどおり続けて二曲歌ったところで、光一郎が「お茶にしよう」と言ってくれる。

「明仁がケーキを買ってきてくれたからな。光流、どれがいい？」

大きな箱の中には、たくさんのケーキ。全部違ったもので、全部美味しそうだ。

「あう〜。どれも美味しそう……定番のショート？ イチゴタルト？ ツヤツヤのチョコレートケーキも美味しそう……」

贅沢な悩みにうんうん唸っていると、二人に笑われてしまう。

「夕食のあとに、もう一つ食べればいい。今の気分は？」

「ショートケーキ！ 生クリーム、大好き」

「それじゃ、俺はチーズケーキにするかな。ここのは甘さ控えめなんだ」

「ほー。それじゃ俺は、こっちのチーズタルトのほうを」

それぞれの皿に載せて、いただきますをする。

「美味し〜い。上品な生クリームだなあ」

「このチーズタルト、濃厚で旨い〜」

「コウちゃん、ボクにも一口〜。ショートケーキも食べてみて」

「おう。ちょっと交換な。……むむっ、確かに旨い」

フォークで切り取ったものを光一郎と交換して味見をしていると、目の前にチーズケーキが差し出される。

「光流、こっちのチーズケーキも食べてみろ。ほら、あーん」

「あーん。……んんっ、美味しい。タルトのほうはしっとり濃厚で、こっちはふんわりまるやか。でも、しっかりチーズ。全然違うねえ」

「俺は、どっちも好きなんだよ」

「分かる〜。そのときの気分で選びたい感じ」

「そうそう」

紅茶をお代わりして、しばしまったりとケーキを楽しむ。

「しかし、光流の歌はいいな。綺麗で、優しくて」

「そ、そう？ ありがとう」

明仁にも身内の欲目が入っている気がするが、褒めてもらえると嬉しい。

明仁と光一郎が目配せをしたかと思うと、真剣な表情で光一郎が言うてくる。

「あのな、光流。前にも言ったCDなんだが……本気で出してみないか？」

「えっ、無理だよ、そんなの」

光流は反射的に断る。

以前、父と光一郎から、CDを出してみないかと言われたのは覚えている。最初は冗談かと思ったが二人とも本気で、明仁の祖父がそちらのほうにツテがあるからお願いすると言われた。

けれどそんなのはとんでもない夢物語であり、明仁の祖父にまで迷惑をかけるなんて、絶対無理と断ったのだ。

しかし今回は、明仁まで光一郎に与して説得しようとしてくる。

「無理じゃない。俺の祖父が、音楽系の大手プロダクションの大株主なのは知ってるだろう？だから出せるし、光流の歌は通用すると思うぞ」

「アキちゃんまで……」

「あのな、光流。俺たちは、お前が将来に悩んでいるのを知ってる。父さんたちや菜々美も、働きになんて出ないで、家にずっといればいいと思っているが、光流はそれじゃいやなんだろう？」

「うん……あまりにも情けないかなって。もしかして大学に行けるかもって高卒認定を取ったけど、やっぱり無理だったなあ。一人で外に出るのはもう少し時間がかかるにしても、いずれなんらかの形で収入を得たい……とは思ってる」

「そうだろう？ だからこそ、CDだ。顔出しNG、正体不明のミュージシャンとして出せばいい」

「正体不明？」

「それなら、変に注目を浴びずにすむからな。プロモ映像でも光流はなし、もしくは手や後ろ姿、シルエットなんかで分からないようにすればいいし」

「今時は、テレビに出ない、ライブをしない歌手も増えているらしい。だから、大丈夫だ。俺たちは、光流の歌をたくさんの人に聴いてもらいたいんだよ」

その言葉に、明仁がうんうんと頷いている。

「俺は今、暇を持て余しているからな。交渉やら手配やらは俺がするし、誰かと会うときは絶対に光流がいやがることはさせないぞ。光流は歌うだけでいい。それでもいやか？」

「アキちゃん、ずっと側にいてくれるの？」

「ああ、光流の側にいる。側にいたい。光流の歌を聴いて、久しぶりに、こう……湧き上がるものが見つかった。俺にとってこれは、やりがいがあって楽しいことなんだ」

「……」

光流の頭の中で、CDなんて無理とか、他の人とかかわるのは無理といったネガティブな思考がグルグルと回っているが、光流の無理な部分を明仁がフォローしてくれるという。

つまりそれは明仁と一緒にいてくれるということで——就職してからはなかなか会えなかっただけに、その誘惑は大きかった。

格好よくて優しい兄の友人は光流の理想で、憧れの存在なのだ。

「本当に、本当に、ボクの歌、いいと思う？」

「もちろんだ。でなきゃ、いくら光一郎に言われても、そんなことをしようとは思わない。何かをしたいという気持ちになったのは、久しぶりなんだぞ」

「アキちゃん、一緒にいてくれる？」

「ああ。俺としても家でゴロゴロしてるばかりじゃまずい、いずれ何かしないとな……とは思っていたんだ。光流のCDを出す手伝いなんて、やりがいがあるいい」

「本気なんだ……」

「ああ、もちろん。光流、誰かと一緒なら外に出られるんだろう？ 伊豆のじい様のところに行って、旨い魚を食わないか？ 目の前が海で、気持ちいいぞ」

唐突な誘いに、光流は困惑する。

「え……」

「じい様に、光流の歌を聴かせたい」

光一郎があてにしていると言っていた、音楽系の大手プロダクションの大株主——その人に気に入ってもらったほうが話が早いのは理解できた。

「でも……」

明仁と二人でお出かけは嬉しいが、会ったのは数年ぶりだし、いきなりの遠出……しかも初対面の明仁の祖父の家に宿泊というのは、光流にとってかなりハードルが高い。

ためらう光流に、明仁はニコニコと笑って言う。

「絶対に、気に入ってもらえる。光流の声は、子供から老人まで受け入れられるぞ。それにじい様は隠居生活で暇だから、客は歓迎される」

それに対して光一郎も、うんうんと頷いて後押しをした。

「伊豆の別宅は、いいところだぞー。海を眺めながら飯を食ったり、昼寝をしたり。プライベートビーチだから、人がいなくて最高だ。連れていってもらおうといい。光流の気分転換にもなるし」

「迷惑なんじゃ……」

「明仁のじい様から、暇だからたまには遊びにこいってメールが来るくらいだし。父さんの人使いが荒くて、なかなか時間が取れないんだよ。じい様の好物を持っていってくれ」

「う……」

行きたい気持ちと怖い気持ちとで光流が答えられないでいると、明仁に優しく聞かれる。

「光流とは久しぶりに会うし、遠出は不安か？」

「うん……それにお泊まりも、家族みんなでしか行ったことないし……」

「もしダメそうだったら、無理せずに戻ってくればいい」

「そうだな。無理そうって思ったら、俺に電話を寄越せよ。すぐに駆けつけるから」

「……」

二人とも、優しい。引きこもり、家族がいないと外に出られない光流のために、いろいろと考えてくれていた。

「いいのかなあ」

いいんだと、二人に力強く頷かれる。

光一郎が勤めているのは父の会社で、社長の息子である光一郎は、他の社員よりずっと厳しく仕事をしている。だから当然体調不良でもないのに早退などできるはずがないのだが、光一郎は光流に甘い。そして父は、光一郎よりさらに甘い。光一郎の我がままでは絶対に早退など許さな

くても、光流のためなら早く行け、なんなら自分が迎えに——などと言い出しかねなかった。

何はともあれ、いつでも迎えにきてくれるという言葉はありがたい。そんなことにならないといいなとは思うけれど、安心できたおかげで前向きな気分になれた。

光流の了承を得て、善は急げとばかりに明仁が電話をしている。そして、通話を切ると、明後日出発に決まったと言った。

「あ、明後日……」

思ったより早いので、心の準備ができるかどうか不安になる。

「明日だと、バタバタするからな。……ああ、そうだ。今日は泊まっていくから」

「えっ、そうなんだ。久しぶりだね！」

嬉しくて、光流の気持ちが一気に上昇する。明仁の祖父を訪ねて泊まりへの不安も、パッと吹き飛んだ。

「じゃあ、ゲームしようよ！ あと、ポーカーも教えてほしいな。お父さんにリベンジだ」

嬉しさ全開ではしゃぐ光流に、光一郎がジトツと嫉妬の視線を向けてくる。

「光流は明仁が大好きだな。兄ちゃん、ジェラシー……」

「コウちゃんってば！ もちろん、コウちゃんも大好きだよ。ボクのこと、いろいろ考えてくれてありがとうね。CDとか……怖いけど、がんばる」

光一郎に抱きついてそう言うと、ギュウギュウ抱きしめられる。

「俺の天使ちゃん！ そんなにがんばらなくていいんだからな。適当でいいんだぞ、適当で」

「コウちゃん……」

弟を甘やかすダメダメな兄に、光流は困ってしまう。家族全員がこんな感じだから、光流の向上心はなかなか伸びないのだ。

自立への一歩のために、みんながなんと言おうかがんばろうと思った。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>